

目的 (2)報において、布の柄とピンタックとの関係について意匠的な方向から考察した。その結果いずれの場合にも、ピンタックにより、布にやや立体的な陰影と量感が生じ、柄によってそれぞれ異なる変化が見られることがわかった。この変化を装飾効果の一技法として用い、手芸感という付加価値をつけるのに効果的であるため、最近では、かなり広範囲に使用されている。そこで今回は布地の厚さにより、ピンタックの視覚的な効果がどのようなになるかについて考察をした。

方法 ファッション誌や既成服の中で、ピンタックが用いられているものを調べ、それを参考にして婦人・子供服地として市販されている布地の中から、厚さの異なる布を10種類選び、前回の結果をもとに、①方向、②つまみ分量、③間隔を組み合わせピンタックをとり考察をすすめた。なお今回は技術が一番はつきりあらわれる無地で行なった。

結果 全体的に言えば、ピンタックの間隔をつめるほど、その部分の布は硬い感じを増し、つまみ分量が少ないほど、その部分が立って、シャープな線が出る。揚柳のようにしほのあるものは方向や分量に美感が左右される傾向が強い。布の厚さについてみると、①薄地で透けるものはつまみ分量を多目にする方が、不透明部分をつくり、視線をさえぎる効果がある。透けない場合は立体感や手芸感が強調される。②中肉地は陰影がはっきりしやや硬さが生じる。③厚地はつまみ分量が布地の硬軟感及び、軽重感にかなり影響する。つまみ分量が少ないと、その近くは硬くなり、鋭い感じとなる。つまみ分量が多いと、重い感じが強くなる。